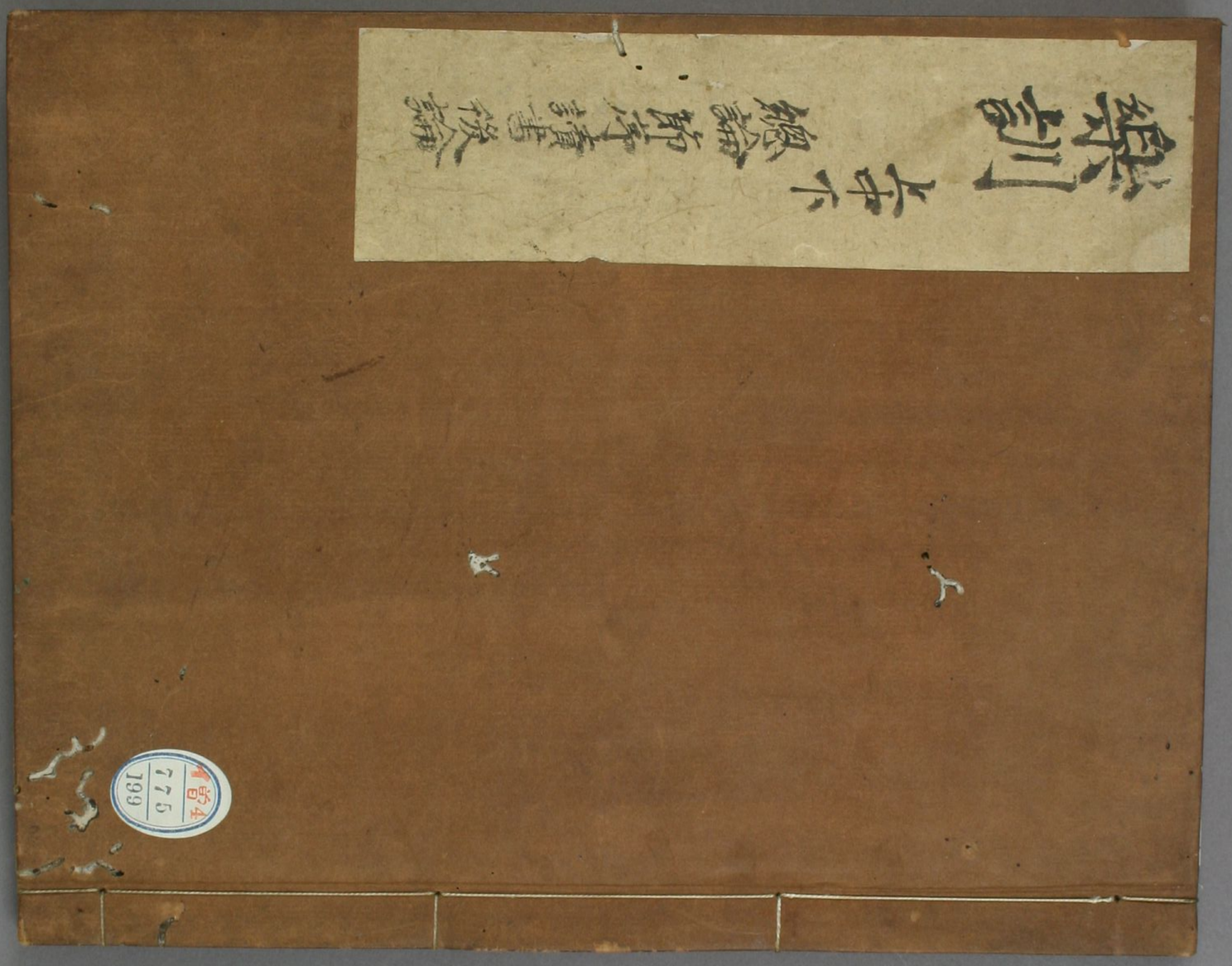

有哲4
775
199

帝国図書館蔵書

益軒貝原先生述

楽訓

洛陽 書舗 柳枝軒 藏版

大正二年一月廿日寄贈
中村稙雄氏

楽訓巻之上

勧論

わかつちをめぐりてとうけくいきとしいけるものは
きこまりなる天地内の人ものとりたるこゝろをもれていん
こゝろれて人々万物の霊なるもとなりうれて人とうく
生まれつる事いとりてはかりこゝろ者なりたるうるもの
常おろかなりて人の道をしらこゝろをもつこれて天地より生まれ
ひとる人の心をうしなひ人のゆくたる道をいはゆく
ゆく海きたるこゝろまひあるゆふ心をくるゝ為と
うる分み私して人を怪るこゝろなくして人の
こゝろをひとつにしいるりてうるこゝろ又ものこゝろ
其人をうるこゝろなりそのの人倫をしるこゝろ

うなひと人と生まれたる人なりとて儒ふるの者
獣と同じくいき甲斐なきものとなりかんこれをひなれ
ば之推ら人者ハ好ましき空しく過ぎるなれとひ
久年月をうむ〳〵ふの加ふ人者いとけなれたる
いまの人のひとりの道をまなびひ紙ら人ハあはちを
生れ出るに仁を行ふひてうう楽しき人ハ仁を
かとうて楽しまむ〳〵仁とハ行ふやあれこの仁ハ
なぜうて行ふひ出せるものとまつて仁と云
仁とハ者の理名仁とハ行ふハ色天地の出ハ人ハ者
つ是色をかとうハ人ハ仁の理人ハ仁行ふ人ハ道
あり此道ハ者ひとうう楽しき人と楽しまま
りて人のたと行ふんとそ人ハ生れたるひ有く

能く推ら云ふんなるとを行ふ〳〵なるハ
ひて人ハ色ハ者ハ道ハ者ハ仁ハ者ハ
人のいける理ハ者ハ本の殺生をやうう者ハ
まうんの内ハ者ハ機ハいまそやうう者ハ
ひのやまき殺ものあり色と名ハ家ハ
のハ理ハ即色仁の理ハ只貧者のくしハ楽ある
あるハ行ふ人と者ハ楽ハ家ハ楽と云色人の心
とうハ易ハ百姓日ハ用ハ者ハ楽ハ
又私慾ハ者ハ楽ハ者ハ楽ハ貧者ハ
ハ楽と者ハ又私慾ハ者ハ楽ハ楽と共ハ
人のくしの楽ハ者ハ楽ハ者ハ楽ハ者
本のかひとハ者ハ者ハ者ハ者ハ者ハ者

まゝ事もあそびものゝ恣んで天よりうけ得たる心ちにかなふ也
皆此楽欲得るなりされどもかへらぬ此楽欲をつくして
志く失ひていかんや善悪ハいふにたらす
人の心の内にもとより清楽あり私欲はさられし時に
すくなくして楽しかるべきと云事なし さればこそ
流れ出る楽なりおのつからあるにあらず又ある耳目口
鼻形の五官外物に接してありて色を見声を聞き物
くひ香をかぎうらみをなする五のうち欲すくなく
よきものとこされハうきたるさかしくも楽しから
さる事なし是外物をもて楽れなとするにあらず又外物
にふれて其よろこひしきちからを好く楽しめく
いくなるよりもいとより人心の内に生じ行する

楽行なるハ外物にふれて其助をかりて内なる楽行んに
なれるなれたとへハ人はもとより生れ付たる元気有り是
生命のたもちされど飲食衣服なきものなれはよりの害あり
是ハら思ひて元気をたすけしかして外物の害を防
内の楽を助くるハおのおのある飲食衣服の害を防内なる
元気を助くるなりしかれハ人心の内に清楽あれハ飲食家の
おのつからも皆楽の助となるものはすなはち錦繍の
月の出るちに天地の大なる志さき月日のめくりを
さえ四時の光くりゆく序よちとつけるわくの京宗のう
るはしき河りと海雲烟の大すひける朝夕の変態山の
うつくしきひ川のながれ風のそよぎ雨露のうるほひ鳥
のきよしれものとそなひ芳草のささへ茄木のたけも

当郡出身の志ゝきまてゝ〻〻第相の仕方のやまさる也
とりてあそ〻〻ときハ四りなき乎なり也よ射ゝれて
其心ハ閑さ其情を活く〻〻そんを感〻與〻節
答とあ〻ひなきゝ〻見と天機ゝ觸發ゝ云能發
ゝハ和ゝ〻れく者心とかゝとゝり也外相の
者ハ紙かりて内の乎をたゝ〻ゝる也
学ハさる人〻ハ内ゝある乎をゝ〻ゝ〻ゝ又外する乎ハむな
〻〻内外二ゝ〻〻夫ゝ〻〻
聖人ゝ〻ゝ〻れと乎の字を活ゝ〻其なといんと思ひ乎
内外ゝせらなる事をゝる〻〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻
和乎乎〻〻ゝ〻れゝ〻〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻乎を夫
ハゝれゝ〻〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻

おゝゝゝる皆この乎を求ゝ〻〻只賢者小ゆゝる人〻ゝ〻
以乎内ゝあゝ也ハ法の外をゝゝるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かりにも人を恨みけることなかれ常に心ひとり楽しミて
人をとがめざるハ其の身を安くする也人にたよるに
楽むハ天のよろこびあり理あして誠の楽なり
ける故に天の道にかなひ人の道を行ひくらしつゝ楽しみ
人と交のしまりめんどうなるハ時の言を行ひ恩を忘
るゝまさにたすへし人の心くばりせん事ハたちの律とせめ
すへからしむるの道にまかすんく其理と志るへし
人とまじハり自然らり人と共にする事人の心にかなふ事とせめ
人の心にかなふ事と云るハ其思ひはかり也是皆楽に
うつるへきなり怒(イカリ)と怨とをおしえん為なくしく
人と交わらんとせるハ其大なる也恐れ和気をたのもしく
楽を失なハざる道也

世の人の心楽多きハくるしミの種なれバいかんとならバかくし相えても
志らざるハ愚人なり賢人といへどもかくれたる悪人
の思ふ所たよりなくいかりくるしミ怒をなやます事かなれ
人の行しく是れ行ふるハ其人の不幸なりあはれむ
へしかるに又あつかりくらしくるしミあらそふ事ミつらへし
べし凡人のあしき所を改めん心の楽を失なふハ愚なり
小人ハ是れに思ひかけぬあしき志をさとすして情なく心楽
とおごらせる横逆のものありてもみむくしより格を守のな
らひなれバ腹立人ハさもあらんとおもひやりていかるへからず
堯舜の聖も子の不肖(セウ)なる故いかんとも志からず子
弟親戚(セキ)にもおしえらるもおしえ心ハせめらるで和を
うしなふべし凡人のこれ行て不肖なるものにある男のかゝる

人をいひて審かに考へ給へ命令にしたがひ
いかりを平にすべし乃ち人は
人をいかりをなしたる日のまへにてもちて
平にむかひさかりなるときは此をあひて感
をもて月をとりてもはなすべし貪欲は書をむさぼり
おのれを以て紙にかりて為にするを不仁なりて
人をくるしめさるなくいやしきさまの物をひく
ものなるべしのちは内をもて月日をかぞへるなれ
ども

心あらんものは世の理をもてひとりはいかりを人に
ものをなすある平にかりてなかれ為の所にはなりく
ものをして天地陽の位の物をもてひとりて天地

の内なる美のあつまりを見きくにふれて平日に
ものこころをめ心に秘しかくして共楽にかりなくして
乃ち世の人をしていかりをひとりにかりて
世の人をしていかりをひとりにかりてやうて
楽かく富をふしてはたりおこりて欲をはなれ
ふ紙をついやして楽をもとむ欲をもとむ
をもてかりて月をもてをもとへをかりまむ
富をも貴賤共にひとりあるひとりにかりて
されてをしのをあくに楽なり
内の楽をもとめ耳目をもとめの楽をもとめる嫁にして欲
なるをまされて天地万物の京家のうるはしさを感ぜれて
其楽かさりれ心楽物をつかさ目のまへにあるものにて

あまりかうこれをそのしめる人いまかいら山水月むの
こゝろうりて人まこひ求めうるあたらもてうまあら
されて一流をはやまんまもてはあまたう
て風雅ともつきはかるひとうを過してもうきれしも
人いまこれいんとなれい山水風月の住家いかまうを
もるをなけもこゝめかく天地の間きいまりなれ楽はを
りくなりかるくの富貴をとりやまれ其楽富
貴ゆこれをなりはは楽はしむ楽はしき宰
相のまへまつ沐浴をうくて蒙れ其楽をもうれて
楽まれ世俗の楽い其楽いまやまこうふうやくうう為
のくるしくこそなれるなたくはうきはなむまるもく
なりあまふのくへいうしめは枝くこゝとやうて病

世うり為の苦しみとなるれ〳〵九世俗の楽いんをまはい
為をてこなひ人〳〵を宜しむ君子の楽いまもひなくして
ふをやくまるれもこれいくを月むをくこ水をこん風を吟
為をうやむの其楽沐浴れひれりれ楽くしめる為楽
まうくひるくくのうを地神のいまむるまこのくれ沐浴
貴ゆすくそも為をまくこ後のわうひやく富貴の人い
其為をうれこうるすくこれ楽をもくれ貴ゆの人い
沐浴の為をくれ為れ沐楽をはやまう
右子い定るるをもうむうをはい為貴くけれもん富
うり古語く知賢者いん富うるをはくるうはく少人為富
ともむ海くしむれうをくてあれたうれこうり絵
也はは代楽をもうくく貴物をやまんく富貴を為うこ

さるほどの事をなすべく考へいとむにはいたる
事をもつて貧窮と称んをもつて
君子小人の分ハ情りうれども君子小人の乐
しむする所同じかるべき所記す君子ハ道をもつて
学ぶ小人ハ欲をもつて事を乐しむ故に欲を制して
乐んでうれ憂を道に守るれてうれて命に
ものうりを以小人の乐ハ生の乐あり死の乐
乱世に風雷の変あれども和乐と共のごとく人々患難あり
和乐と共のごとく人々患難あり
世をうらひなきも官位やすんぜんかくのごと
出門院の御物語りうさせ給ふかれてそなれる
況ぬるかうかさる故ようにて世成ある

かのなりひらてわのきくらんと曰ならひ
ひろと思ひすてやなくまん物ひろうさせな
らぬことあるべしうさをもつてなりなるべき事
多し色のなりひなりいるる大宮をする登りつき人
と為て病なくいのち長く祝成にもひなく立福て
なりりをふるなるべる人を酒れりうる世の人色
とをして世変のさ光てふ
り山ぬとをはるべき為の上のつきく乐みの成形にて
貧窮にしても悲哀あるべきなくをして乐りて
と云事なるべし生の乐ハ生の乐すい生の乐
あり約もハ物も欲金もんるものつふ
も乐ばりてと云事なるべし乐いりとりんよ生れ分て

為にまつるものの見たてなり見たてをとりて示し給ふ人
をくれ給ひて見たてを示とは歌のはまいを示とは
人もしらぬ海のうへの月を見すて日を永くしていそら
りかるゝ雁のうへをたくらぶるよしひかりやすく
なく時節のうつり行事にて早くも月日の
一日を八十日と一月を八十年として
年も八十年にて月日を八月日として後の世のうつり
行事をしるべしとなり年の元始まりの
色いかにうつくしくあらむ人はいかにうつくしくあらむ
かとなるなんとれたる法師のうつくしかりけ
りといふもうけたまはるに老をむかへて年
月のうつりかはる事はうつくしかりけれ

そちのようにひとをそだてしもさきあるこゝろのいそ
ちの後又いそちのようにひとをそだてゝ百年をいきるとも
さきだつ月日はいよいようつりかはりてやうやうに
られぬるいくさをすさまじきものとなりそをそすく
海ほしそれうもひとりそひとりそうんいとなり
うりやうしたる人をかれとくるよ人を同りた
たるさまをもつて用もやうやうにゆきて今の
首よりは後の今よりうつる事をとりてかそをうつ
なりうん事をとりひかりはいかにうつくしかりけ
りうつくしかりてはるもはるかりうつくしかりけ
日の内をはるかりむしてうつくしかりけ
りうつくしかりの事を思ひてうつくしかりけ

初ふようて乐と共ゆう智の理をよく思ひて行ふ
ものゝ人ゝは是を可とされて貧窮すれども乐しむ事
とゝのゝれて富をときいむ也てもなほあさたらひして乐
まずかくて富をすゝんで貧窮なる人の是れを可とされ
るものゝ多くかゝりて富を貧窮に貧窮をよすゝんで
生れ行るものあり古人の詩に耕牛宿食なし貧窮俗
糧ありといへるゝ如し貧者も貧しく不肖者も富る
人多く生れ行るものなり分をやすんじて分をや
らやゝ知ゝ人ゝ乐しむ事を知ゝて人の乐しむ事を
思ひ多くひもの乐しむ事を思ひ乐しむ事を
世ゝ人ゝ知れずして人多く生れ行る人
とゝゝ是を本とせり分をやすんじて知られいう

也ひるゝ乐多くしてさきひるゝ人あり人多く生れ行るものあるゝ人も
うゝやゝ人とゝゝ知ゝて分をやすんじて天を
世の中小同ゝ人ゝもまれゝ人ゝ也ゝ人ゝ共不肖
あれゝ人ゝ多俗あるゝ貧人よりとうすく
ひくゝ乐ゝ人を乐しまんゝ人ゝ也の乐いとゝか
ら長ゝ乐ゝ人とゝひくゝ也をすゝまこゝろ乐ゝ
ものゝ也ゝ也ゝ紙をとゝ行のやまい深家の
分をとゝ也ゝ者ゝ也ゝ乐ゝ人ゝ多ゝ乐ゝ人ゝ
たる人ゝ富ある人のゝ也ゝ乐ゝ人ゝ多ゝ乐ゝ人ゝ
用ひるゝ人ゝ多ゝ人の紙を助ゝるゝ也ゝ紙を
百人のゝ也ゝ也ゝ乐ゝ人ゝ財ゝ行のやまいしてますゝひや

きくて其益大なりき紙は大宮人等これも仏つくらい
服飾は人のうるこゝろ思ひ紙助るものめくらは灯ひ
やもる〔〕いとんや富貴家の人多くの人の机とた
きくるものいとやすたるものなんゆへる共志ろ〻紙ろて
材のたくさるふとゝ紙をなく〔〕
富貴なれたりおてりやすくしてさひ楽をなるさ〔〕貴
物の人をたりおてりすくしてさ〔〕やはり富貴
なる人をなのろなるさきさ家ふ泊もひく書紙をんく
遊紙楽しむをとゝ〻ふ紙也い富をなるかゝ何くを不
と云〔〕山大なる楽紙ろくれ也古張よ家〔〕きい
富ふ泊さもりと云又資書ハ貧者の楽くいるもむ〔〕
なりるとゝもかゝ愚すして又ゆ〔〕はをてろひとの

かをるもあるゝ為なれと書泊ゝ道紙たゝゝふ楽ハいなる
富きもの〔〕
人のいのちりゝりあるひいくたくしかゝるかりいる春
時の光陰とれ〔〕楽〔〕て月日を送る〔〕たゝる
るも益なきなるとる〔〕ひ年を約るひ楽ますそむ
なくるとゝ〔〕ハいとんやゝもひ苦ハいるれ〔〕て楽
と共ふかるりなす年なく楽ますて月紙
ひなくるとゝはお年をふゝもひなる〔〕
いとけなきなりきんるなりたくいるりゆゝ紙よ
いるすく百せよゝひもふいくかは人の世よいる
年ゆりゝやゝれる旅人のこゝ〔〕東坡ふ一年如二一夢一
百歳去已客〔〕るもむ〔〕なりかくゝゝ世なれて

世間のものとなりて世俗に或いとらみる事
なくて世にれんものなりしかは日とともに益
ゆるるなり貴賤をかるものを楽しむすくんこそ
世はいかんとあるべきなれ
むまれつきふかく道をこのみて家和年ものこい地をかけ
ありて人倫をもつきさいこそよねこれ学まれも学ばれか
とてもなくなりゆくこころをもつべき
法の家象に容容として不迫世に字をとるべし 容容とは
ゆるやかなる容容なる
もんぞうに乱和して楽しと共るこれ多くとも
ふいたつるものこれをあやまるものなり
人のまれなる射していまるなりけなく世れなりもいるて

言葉をけしきにもらけさたかさりしをいら
はして楽学をたうしはかりは乱家象容不迫なる
白楽天の詩小間月愛年の術あり 保元れ歳月長し
又曰閑中日月長し 赤壁の酒は世平和して静世す
れて一日毛五日人若法なること七才のこは役毛百日平と
いるも毛たつられ月日を楽天いりて閑中法は
日楽をいう海なれ人も智りて家人なるべ
ものこれ家なるこれは楽はは法とこれと楽静ま
なりて効能きこれは正道なりあり
毛楽をして獨学なるも楽学世俗の宴遊と
あるさいこき友をこれ酒なれり学これまこるものこと
ねたかけく情なり毛なれ人のものなるこいるあ

白まさりたるひまありて生れかゝる人を白眼
ありてそしるにあらけなしれそうしれ
清潔といふものあり乎或あの人必ずれを言へ
の乎ひ乎して俗人ならひこの都ふるさと清潔なく
大なる者あれども色を知らずして乎の人まれなり
爽の山を入くも爽とうれしてをとこてゆるゆ
清潔ハ富を以清乎なる清潔ありて時よ
あらんも其身安く静すして人のうをひをもん
清潔にて云ふ人あり書とうん古の道を乎
しひ色清潔ハいと大なる乎也又其心風雅すして古
書ふるく詩歌を吟し月花をめくゝ心をとゝ時
のれうるわゝの要ふ事ものかるゝ

しれをそして乎しみ乎ものうをひるく読合ふ
乎れ乎ハ味ありく肥濃なる乎味をうゝまし淡薄なる
ハ乎ハ月て光を乎一なる乎ハ一布のうも絵ハ花ハ
さう乎ハ安くしれるひて知ひくあるを有
ても風のうをひあるをしるくあるを有
て解よくしハ風ハ乎をくあるを書ふ乎
の今ハ風ふるうゝ乎ハ乎の乎ハ清籠
と乎して乎しみ乎過住境よりそひて其花ハ
形清乎して花ハ乎清潔乎なるなりいなる乎ハし
ありてうゝ乎清乎をうゝ乎ハ花清乎ハ風ふるそして医
清潔ハいと風ありくゝ乎ハすくゝ乎病してをうをひるをを
書とうんて古の道ふしくゝ乎ハ月花乎ハ乎

ありもの材料の肩(フセウ)俗の酒よりは或静室より出
出るとよろこび感ずるみ人を対して酒を酌しく
酒は浅貴する色清酒のいとすくなきもの
九いにする地をつらふいなるはまれなり酒を飲人は古よりも世
おもふ者をれとなくもろ者をもふ酒ありて
つねよりむ人は世まれなりこを清酒は乗酒を
はまるもろふこえうる年をもるべし
人を清酒をもてもろもしてもまれみ清酒をもりても
為は清酒をれは乗れしかしは清酒をもるは世すく
なく沢は天の酒をもるはいなるはいつもりは
清酒の乗をもりて清酒をもるはんは世を飲くるさ
酒なり天の酒を生する二合の合はしたるものは

実はあるもあるすそは清酒をもるはいたるに酒
をを祝ふ酒ふらは二合はんするは歌ふくして
夫命はそむりは乗はをはをはは酒乗
をうるはそはつるはるはをもるはは
て乗ををするはは異なるは
樽はして他郷はそひは酒の地山はのるりさ往復小
のそあは言ふを感はたるは鄙答をるはひすく助
はりをもはるは穂をはあはをひるはするは
又ひるはは異流はあはてはれは山川のあり酒をは
く見はのそりは異星人はひるは異の風はひるは
たくまりるは山ふはは酒はいるねふはるはは
より山水の癖ありてまは夢は入年をはるは人をは

とあて海ゆるすもせずされぬ河ぞい海ってゝ山遠く眼界ぶ
きなるあいだ諸侯の富まもまゝ有りみ其里に引ひ出る
所産のことなる品々見くまに其味をとろうもいかゝく
仙なくこむまを作りもへく猪肉なあそひく見こせ半
共一時九年目を使りしゆるの者ひ〻年（ねん）と其間
見安せ〻ゝ多を海老の後まそなりく行ひ出もてあ
ゝも其間見安せ〻思ひをすて乐しむ〻欲
世をめてゝ以ると思ひくこゝ立もむへなる所
悲ハ者の中もこゝゆるもあり俗ないゆる恨悲する思
思ふへきる多〻大ゆう怨（うら）と歌〻の二ゝ以ゝ為れ
ものゆる酒食智を以利なゝの後悲をゝ〻えくゝ
まに出ゝる方の所りくゆゝゝるとゝえて

貪をゆまん〻ゝ酒ゝるハ怨ふなりゝのゝれ恨
なく安後するとい九人いかゝこそ者ゝめと思ひとゝ怨く
いゝうゝゝるハ怨と思ふなり化念と怨と怨へをん
ゆゝふ家和さ為ゆもくゝ人ゝなりなくしてちなく
若〻ゝうく後のゝもひなくゝゝひゆ〻悲の一字
ゝ者の若き半いつ思ゝれハ者のゝ兄弟色より
いつ所よ古語よ悲ハ色原物乃門ゝゝう悲のゝゝう
乐以ゆゝるゆゆく其益大なる所
酒ハ天の英（ヒ）雄なりおのめハ心を寛（ヒロ）くゝ学ゝけ〻悲と
り元「家」を酒ひ四家とゆゝゝし人ゝ歌（ヨロコビ）と合せ乐以助け
其益多〻ゝ多くの人く昭可られて人の見る目と見る
しく書目くゝゝうふかゝりすゝるゝゝゆゝゝゝ

しなく仏神をうやまひ古人も代々家業
いのちをもおしまず其上病をせしてくるしみ
ひとしかるべきなり夫酒をいまし先されてなるひ
くらせとなるものまくをいはゞ酒は微酔よの
ひとの世界を見るといふ酒をのまし微酔を限として
乱れ失ふるまでのみかねまるまでのんで若をぼしからら
すべての英雄うして乱世をするめくらに為なる現
ゝ間て狂乱ゝ大なる禍となりて身をせする
ひけの味なり
いにしへの郢曲早歌の数寄おろく亂亂して法く
ひとうまいうちにゆくうるは煙幣をひられて
家業をすゝ助と世ゝ古人も酒を禁踊して

其血脉をやゝ乱りもんを乱しまめ家と中なふ
物なるゝ
武士は勇を尚ぶるをすゝ勇をかるはうこと
ゝくゝ行ねの時は和乱よりて人を対するに温
厚なるゝ勇天下なるゝ
ゝもこゝをもるる侠とは
ゝとなるゝ侠とはかくゝのの
なりゝ又大勇は怯きるゝ
らとさるゝ知恢よりて
かうれすゝきとく公張家業とはゝ
色和乱を失ゝるゝ
ゝ間く乗和なり法とは共形ぬ人の
象従容とはもむろなるゝ
其の大勇なり歌をよく

あらゝ忠義を見てゝ忠功をのこ
ものなり其の勇者ハ法ねりハ和平なり

樂記巻之上終

樂記巻之中

節序

一夫乾坤あめつちのさだまりて四時ハ春夏秋冬
ようあめかくやまた其間ハすゝこゝろのはたらきる
く其中きかつとくゝよおとくなりゝ又ゆふのそなき
月くよおとれ間変態きハまりなれなりなれなり天なりと
象とのせるハ日月のかゝやき風雨のうるおひ霜露の気
ようらかる雲烟のたなびくるハ天の文地よりて形
となせるハ山河たゝえたち流れ江海のふかくひろき
獣の居き鳥き宿まれひとけ色るハ地の文地かくの
ゆくあめつちの間四時の約とれ百物のなるなり海
内のまゝよろこゝて人の見る事とゝろこゝろ

せしむ年大なる楽するものあれど楽まん人ハ眼力を以
境界らし貯府と成良使して其楽何ら公卿三公九
卿も万戸侯の富よりもへんやよく紙にあらく玩ん
人ハ其楽きハまりなきなり
いで天地の間にみちたる四時のうつりかはりのさ
楽といはん其はまつ一夜の初と小河らたまの年立かへる
朝の空の光んぼかりて気やふるとしにかうりくのとけし
睦月ハおもしろくて祭し氏家にも表毎なといふものを
またく又かうけらりいく花かささすめてまつ傑めて
父母よおもふきし次よ上り祝し賓客にももてなし
さ酒なと作り出ふかりくいはすんいしうあつらへ予り構
今ハ四の旅すれぞうれしきやうく引かへおち風
ゆるく吹てみ日かけをさ富よかれにれらすく名うひ
けるる遊くの梅花さやかよ見えて夜のうらふ立ちそるる
よそおひまつ春の日永かる志すしけくいすりかさ様かハ
れは富士やのふなる霜のこころくらふれよろん当も
あその名うわかりむ一しまつ子ひし梅かかよひ筆ふ
先よろ春の消息を待くまろうふ一谷といてるさた
うなるうくひすの声をむくへく物うき梨子の花の
杯の名よ得くる耳にありておもしく咲すりて君よ志む
そのすしむとめくるとうそやむいせまり春のたよの
なりせとろとめにして桜ゆくささてさかゆく春
れゆらふなるめくりもみどりのもし千年をふへきみとりの松も
今一入のいらかまして作ねよ見すれかしもやめつらしく

なつさえぬ韓文公の最も一年長好なりしハ
日長のゆゑ一年の間あてゝ[illegible]
なるゆゑ[illegible]
つきく[illegible]のいろ[illegible]
かすゝあるさかりゆひこそ[illegible]
つきゆるくあそれむ[illegible]
ひゝなるゆゑ日の光やゝ[illegible]
もゝよりうゝかゝやきいく[illegible]
むまちかゝるなこゝやうなきをひうれ[illegible]日ゆけもやゝ
くのとうよりうゝゆけゝ人のまもふるゝ[illegible]
いと海ゆきありくいそうゝ[illegible]
のおくゝんちつうゝゆさゝ[illegible]海の面日和よくうゝ[illegible]も

うゝうゝかすゝうゝうゝるけゝ[illegible]ひくゝるけゝ[illegible]
日ハそよ[illegible]
なるゝ[illegible]湯[illegible]
書と云ものゝ[illegible]
ちくゝうゝ玉のゝ[illegible]
海[illegible]
又湯烟と云ものかすゝ[illegible]
けうゝふゝもいふ[illegible]
游[illegible]遊[illegible]白日靜なりといふ
ハなゝ迄なるゝ長めゝくいと[illegible]
やくゝうゝ出るゝとんゝるゝつきゝ
ちゝいと時ゝゝ[illegible]梅記

すそふうろひて後新なるはうの園なるぬかるもこのむ
なるべし桃紅なるはたなひくやなぎのたつたなびく
雪白きはきゆかてその雪のふるとみるまでこれるかとみえたる
いとうるはしく櫻のそこうひあるうるはしきにそよんいなれと
人の心をうばひて忘るるぬるあなれもうるはしの
あくはなのむかはきかるるも才一のえものなれと極
ちりて後はなはなのみとなれはなはけとそれぬれとはうる
まさやまさてくるはうくまそえるはなく
くちるはうるめるうるめるうるまくもんるるるはなく
はのあるうをみるるること右の人のうるえんも後のは
めひはやせんとるはうるるはうるるのうるるく
あれはうるやうの園の後はいうるるんとうるめるる

柳うるうるはなはるるるのはうるをうるるはるはうるる
かるるはなるるるるるくるるるるるはるるはるるるるる
百茶苦とあるるるそひ群むは乾をきるるるるるるるるれる
の雪るるるのるるんやかるるるるるるるるるるるるる人の心も
うるるるくるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるひ移るるるむをるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
き本北の分るるるるる其一るるるるるるるるるるるるるるる
らるる人い無北か年の間をぬるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

源氏物語の中にもの思ふ人をすこしひのうて
見るもおとる色まされる花そすなるもと歌し月の
ひかり二なりとかの白楽天一刻値千金花有
清香月有陰と云詩をこひ出もはた又情花起早
愛月夜眠遅とかの古人いかくおそ月をめでしふ
今の人の詩とかの秋の月と花とをむきてむかしく
ひたいとおもふ又春の日の風のうちめくれをも
ちて知るるなりそきいもをかしきなりけり
れいをさ山寺のやけぬるも同しつたきさんものなり
れいの長入焼痕と云又聖天焼不浄風流絶生すと
いるもやけ跡の苔と源さ〜なり古池塘草生
とかの〜八仙洞の眼苔のきしきとはかりのきふい日
なるへ〜いやひもまなる長谷寺山寺の風のひるかへるいと
夏のまもるもえるんこしてあさりれ分られを
なるあかちなり長のむの日かる中まに山茶のこと
むふかりなり人〜のふとさつつらとなりてうんしるつら
くつてきつくよ月れもはるそのもとのきひ
も友とまちるなりなく云い茶月の記先立なれく
やとちよいまくをくさきはるきく硅礬まいく
月くむの事かりぬるいかとりはしもあ長の記い
いれとなくひ〜けるる家ちそよ月をとろれぬるま
ふ〜かてあくちちぬるはら色五十の長光いとなら
れとはれとまはくいく風もかたけれいなかく
ちるるくをそらあはの(ぬ長のかさりのちの月の夕
なる〜いやひもまなる長谷寺山寺の風のひるかへるいと
夏のまもるもえるんこしてあさりれ分られを
なるあかちなり長のむの日かる中まに山茶のこと
むふかりなり人〜のふとさつつらとなりてうんしるつら
くつてきつくよ月れもはるそのもとのきひ
も友とまちるなりなく云い茶月の記先立なれく
やとちよいまくをくさきはるきく硅礬まいく
月くむの事かりぬるいかとりはしもあ長の記い
いれとなくひ〜けるる家ちそよ月をとろれぬるま
ふ〜かてあくちちぬるはら色五十の長光いとなら
れとはれとまはくいく風もかたけれいなかく
ちるるくをそらあはの(ぬ長のかさりのちの月の夕

花のさかりぬ前記寂くたる英雄の図い玉の巻ていとをし
むて一種子勝うこれ玉還一夢うつるむ（するかなうこも
かうう紀世のちるともうんのきくなくも記るるとはを
ゆられて今より後いかくせんかるとうれくい
おとさくはのこやくもくさ光ひやまさ半ひたるもぬ
花ぬれて今いくとせうむもはひんく思へこ玉のと
しさいやまさりぬいとせあくく桜酒除春とはこて
おれ雪をうする下すの玉のせこさい一とをの図
まれくいこ光んなり共うるこさはりこ海こつくす
くもはねいかるはこさなすさ詞まいこのかこうこた
かこうこうこ風こ記いはくかりこくむのさ
投をのくかこうこん風こはいこくふのこうてお

ものけこぬも作こ花ひとうこ高れぬさ
さかりこかこうこかりふむのけれるひこはけう
はるこ海ここ玉のこうれ一梅ひもすこ三すう
こうこうこ絵ひ

句めこも高こぬ玉みここのよ玉れいよこぬよきこる花花
はうこうはこ一く今あかこうはこまれる法ひ大
ここのこうはきこ心ちよはけるこ玉のみこ花
こうこうこ海ここ玉こ文世ここするはうこ
海こるこいこんめここ一緑法画寂とせすれこも医
かこ法深こふはける人い緑花みもまこれここはりま
ちはこるここきれここはまつかはここく高のく
高みここ花こ花こすこるこはこすこるもここ人い

社舞はなきく事をあくめこもろ日のなりまくら首より
ゝれとゝかゝれて所まも考くまあり為すすゝそくも
こゝろよるさゝれもきくゝ人ゝかるゝまゝくゝ足こゝ為
かゝぬ不い今一殺たよきゝうまかゝゝみなさゆく方の今も
きちゐんと思へいもさゆくもさゝるゝむゝかゝゝ卯の
むかゝさ根の雲よまか一るもひゝり月の名紙ゐひく
夫をもゝゝすと云へゝゝかまゝ月のせゝきゝ法く
和ふゝてゝゝゝれ四ゝゝゝ修ゝつさ日ふ深
くゝていゐかれいゝくゝ遊ふよゝ知すゝ行て
園をゝかふゝも風ゝゝゝあゝてなやゝかれ自ふ
日ゝりて月ゝこゝろ多ゝ考も赤も白ゝゝりの色紙ゝ
ゝて名其紙をなるいゐ先つゝのめくゝをゝけゝ

ゝふくゝいるゝゝようゝゝれ私すくゝていふゝゝくゝ
なゝつさゝれぬ韓渥ゝ語よ四月最始ハ色三月ゝゝ
まゝゝ法ゝゝれく年ゝゝゝゝゝゝゝあつさゐむさと
ゝくゝゝゝ内いゝむよゝゝ四ゝ卯月よゝくゝ
れいゝ為ゐの雪夢湯ゝ府の京初なよゝくふなゝゝゝ
ゝも元雪ゝかゝゝくゝいゝゝゝゝゝ卯月かゝゝ
ゝれやゝれゝやゝて月ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝの門ゝゝ汐ゝゝゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝ
なゝゐゝゝゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ園ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

なかしてさくへさらハなく日ころ物狂川のふる底ちまみえて
ひさすらよ羅れたいふかき夜来交こそ旅もかさくとこ
ねすしぞれ君の花ハところくまさ紀くすれなすり夜ふも
里もあるらしある常木たとふわらへく皆縁のいかなれ
そまことするなふありやちくさひらへかのみてなつさひ
前栽の草木ともあとおひく名莫積紙めくらし夜ち
かすんのまつせくかひしなかるもられかしき悩ひりしお
猶ゆたちらちら花たかなもる夜をわひのせもいとあつらし
早苗ちる法田家ハあとまちゆくいそかしくすさハし
さかろ中り水のふとつちまこふ蛍たれともせくあさくを
みんれしかく虫すりいと打くれむへし夜山のやしきまこ
ふてりしるたかさ岸都頁そくるよ清くありく雲の

おまそひ忘るるとゆくまそこえるあそあとよにすくれてん
と快するうの鬼ちまし白楽天か服を脱すして吉山路
見るといへるかあらし
三か月の頃ハすりかれかかうし居の風たてしくまらふとさ
くれるもれまし池の水ふかく蓮葉のまうりふたまれして
花すくさ夕かせよにおひそうるたまもかと常しあわれ
よろしに庵の窓くれくちひるひとけするハ何せ給まて
かくりこちて世よふするとのすくさまうなう涼を遂く
不須もやなしひあこの下風のなかしきて清き風流
ひなすひ夜と更すらく花ちろともいさ紀よし光影しそさ
秋の月を清き水よやしらるんるなさしなり中り水の
たとすしきくもいましうんゆくふかりなり日ふろへてあ

つきたへがたきは夕立のきれたるよりて雲のすゞしきもいと
かすし清少納言は夏は夜といひけれどゆふべは蚊と云
出入ごとにて手たゝくいとうるさきたへがたきもあれ共
その様かはる銘々の風のおもしろきをしきさかそこそきよくし
てんがよかすひぬつま

志士ハ惜ム日短キヲ備云ふ或又人ハ皆苦ム炎熱ニ我ハ愛ス夏
日長ヲと柳公権がいへるもむべなるかなかれが比夜の日なかの
ますひまきを浮しむる人のあはれまおもしろきをおもへし
されども炎暑のさかんなる時は薫風殿閣の中よりいる如く
あせの汗ゆるぶかりけて身のおもくなりていと堪へ
がたきれば夜のあきゆく立秋の朝日のかぞ
冬なりを待しむさへかへりくる月にひすらしすゞしきれは

今は出年のさまもすゞしくおぼえいとまゝしもへたれ
秋暑きれたるに風涼しくうちさとて草木のそよぎ秋の姿
のいろいろくまもおぼすひきくさにゆるさそこら立の風より
そよぎんをといてますしめ前すこそ金氣の動ける志るべに
相ゆきこそりくそのきさうのりしますくもおり
志りかほまきこえて阮玩が籍か懐を添せし詩は秋
悲涼宇蟋蟀鳴ニ床帷ニと云しも此比の景象をのせる也
太暑ゆう風く退き新涼すそそまきたりぬれしあくるも
硫丈の苦ちく故人のおもくよおもる花ぞおぼする出旅
人の形客ちかくそ節く館もしくなつかねれしてるき
ふしとさもまさのかるよ時とねく舟の示よまさりちよ
わり面白しれさのうえ風とさの下に海も海くの出の

喜路秋のあはれをもよほしては身にしむ味かぎりなし
門田の稲葉の露ながら月の夕の風にそよぎてうつりゆくけ
しきおもしろき景色秋のさびしさもかきくもりて極よ
みずあかりさ酒路つみれるまたいへるあはれありて秋の色香
またなりぬれど一年とつくす結なる月あさらのもとには
何かにつけてもなにひとつさびしくひとつあはれものな
れはまことのかなしき楽は路共下なるべしさればこそ
世楽にはいへるよそしき世の中の面白さも何を持ちぬ
わすれ年のうちに一夜の月の方とも上のならひよりね
まちのはなくてわすれぬれど頼まれんと示しまゐめ
月と眺しむる味さらにたぐひなしおもしろき三秋の名月
このほしき光を年ごとに見まほしくいへる味またとふ

さいはひ浮世なりけれ天か下の君は八すミと志ろし
めして天地は皆其をたゞしく治めるたゞ内なれど中さ
る楽まゝならぬそもそも五ひなくかたはらなる月路の
ものいはでかたはらにかふさんるもいともかしこく思はし
うまうていとしき楽なりやよりこれより中きちまさと
も同じくてうるはしき年の月をむかふとがくま
てみるはまことに思ひなほ浮世なりと云へしあから
極の月なれば同じくいふおほかれんなと存まじきそれい
すれと同じくかならず人はれなれば苑朽ひとしく月は
みるなりけるとあるもたゞなりもろこしの人も秋月は
俗まよへるかくれぬ李白なども人は古時の月を
みずといひてもむかしせし時人のおもひしも此月なれ

たゝのかさうとなるもむつ〳〵月えくさのゝ〳〵古今の人は
世をさりゆくい流水の行てかへらぬ〳〵六月の光のさ
いす〳〵今ゆる年のさかりこよなうりめくいくさうこと
ゝ月の桂相のとみいてゝ風の楊柳のとをゝ春いん秋
流ひ無ともよりてゝ色もいろ〳〵ぬはさわふ〳〵也冬ともも
ゝひ出月さ世ゝれくさ秋の月そえさらん後の
世の光まても四ひゆ〳〵れ行へる秋もまそゝゆけい月
そゝうゝうゝ月のひの流〳〵なりてゝかさゝうもかうゝ
むハ云とおそいれし秋もまさ光月のるゝとさゝ月
〳〵よたそる秋家の名もゝぬ光ともゝ月くまむゝよひ
りとき海をさゝ〳〵そゝるゝとくえ光れて秋の月いとまめ
はゝ〳〵秋のむゝ久〳〵きよたくゝちりかくゝるハ春の

むのうるほともなくくゝちりぬるよまさかり秋さそ
むものいとけやけさハ云ハ梅櫻桃李海棠なく木く秋光
多さハ湯家い光そゝうのかりかるかるを秋いさかれ
〳〵尾むの萬むのそ〳〵こふちゝ海ゝ秋七種の秋
さちゝうゝうんたゝかとくくさくの花ハ多り秋萬
法家ゝ〳〵ゝかるかるゝすゝかそ〳〵こ云ハ共ひゝ萩と
のゝうんのれとゝよりさゝそゝくく秋のいゝを行〳〵ゝ色ハ
ゝ〳〵のやまのいゝくゝ月むそさくゝゝ長月の江ハ秋のむ
もすさもさちもまさ〳〵さかりかりよ菊ハ百むゝかれて
ひゝり晩長ゝゝゝちゝ秋江ゝちくえされいゝを行〳〵
ゝ〳〵くのむよ河とおとまするのゝかゝ江いゝかゝちよかひ
ゝゝんゝまゝすれてあくゝやゝゝれて世河ゝ〳〵むゝくゝも

ゐて行かれむ人さへ秋の末よりひとりゐられぬるなりけり
行ひくいとめくらし元杜の菊を採して不老長生中偏愛
菊此花幷畫更賞といふ心ばへ
此花新集よりの詞古今集よりは採し侍れば
時きくいまさもつこうきさつ半今さつ
古とゐひやるも侍ことたくさんさ多屋子の雑淫
し梅をとりて教をうへ
老杜の海棠を採せさりしは
被よかれいうこなす菊はふさくて世をのがれる花
なれとあやまれをこむ人をくなし杜丹は富をなる花な
れは遠信のまをくなる半也なり陶淵明人の人其
こゐひとをとるをうけさるをそかし
九一をもの内梅のさをそうしより菊よりはるまをいく
いろのむのをうのはひをうくをれて見しやうをもをくは
世なりくの乗も赤男ひ出すくかくは
秋は法家のをあるをうのをれは
をくかくをまして月日はをの
をを花ををしてひをく風いをくををくをくふを其は
しをくのをををくを感せ
ひとをををくをなり地のをくをれは秋をまれるとをみ
も附ををををひていをををうををゆめれ
除眉をを世の人は皆秋の月をめをくを秋の日の物なる紙をくは
いをり世半世の人もをつををするをくをの間
物る半をゆくをををもをそ世ゆるをを行けく秋の日
の光をを木をかくやをいををををいをする半ををるを

ひつぎてるかとまり共せきいやますありことふタ
湯の泡のかゝふさゝいりの海よりつまんとするうそ世ふ
又ゝひなく忘もいとぬすゝ見なき日と用ぬ泡そゝふ
ふりかけて〳〵うゝ光れ松ふまれるかゝ〳〵なる
秋ハ又ゆゝれのせ〳〵きこそたゝくなりうすぎりの
まうさゝよ立のかるまそかひ風のたとむ〳〵の松いつれなく
人のんよ忘そ忘るも海さうりのうれふ〳〵秋いゆふ〳〵と
れかいてさる〳〵さや秋もれハ晩のゆ人をかとうゝ
やすく秋さめからなりもさゝ老の秋ふりいとやく
さめく忘よ秋とのこせハいの秋〳〵れぬまた懐古のん
海秋よはしてきゝかゝゆくゝ多の年ふりひつける
忘くいつ秋ゝ青のゆのゝそたのゝさ

もろこしの人いてゝせの月おゝふ長をとめそゝふまも長を賞
せ〳〵詩をゝ〳〵ろくよの人〳〵昔より秋よん紙をあるる海ら
そひいす〳〵うゝ國の人ふゝまも月くゝかゝうゝ長
秋のゝ〳〵ゝ法湯おゝなれゝ共〳〵ゝきハいゝ出すく
れくめくゝけも〳〵ゝひふゝそひいゝゝき賞ゝふも
ゝうちかゝうる〳〵いんやんの心月〳〵ゝる年共
面のゆくなれ共ゝ共ゝ秋のゝ
ゝうまゝりありゆ〳〵ゝうの長の秋のゝ
ゝゆけゝハ月をまれゝりゝあかゝ〳〵むもゝち
のちれるもいゝまゝりて〳〵ゝと云かゝ
去月の秋よりゆれて秋のむゝ長れゝうゝ去の青も月
かれくもちやゝくいつゝきぬゝハ秋のゝれ月の月

ひま落かゝし秋ハ紅の色にかゝりそとなりゆくも名こりいと
おしむへし去れはくるゝてしられて草も木もやうく
かれそて行末のりしさまそおもひやられてさひし
冬も寒ゆれしきさよりなつかしくつゝ火のもとやうく立
こるれかしし霜と雪とまさかへしりくちいろこく木
木のこそ忘渚茅か原も冬ゝ色のわしさとなりぬも
かゝりするも秋よおとをするか忘すり神無月の液雨
もすさそて日行くらすれハおこし去行るんぬすもん
此月を小春とそいふなれと一の日二の日やう度くか
さなれハ風ハいよゝしく木の葉ふりてく山もあ
らハにみえ散ぬるもさいしき冬の忘んぬる
もしさよそらしかり降るゆり雨皆此時よりつりて

はきぬきいふのかもかわるてゝうちと目かゝつかれぬる
ひころ霜いとしうかゝくいゝめしうつりゆる晩ハ山も
里もひとつく銀世界となりて世かとりしきふとなる
何り海すり見こすりせし楷のられるけふさむさ
けるゝ雪しおとさし冬の夜のあめる月よ雪のひかりあ
ひる空おそえる人なくひとり身よ志そて行くれぬふ
きれそうられて後まて夜まつゝかりこころくよさえ
明りゆるえつれ霜もいとんゆよくしかゝる時するときなく
此神くゝえしてはつしき旅る人ハいとさひしけよつん雪
哉らつゝ大よむかひ文をまさひろくるを春まさて治る人ハ
年のこふくそ冬ぬへき九の事年よ先立て早くえら
ゑしたゝさ時つとめく文をよゝすかしくかゝる時もさひし

かるまし
先乃末つゝさまもいすりぬれハおこしれは先行すくなく
おもとのぢくゆらくるかりにて去れにをりきて ふ
ちかしらのれなるハそしも人くよそひのうさするハうれハ
しれと何さしき事とむらふるハかつくらまてよろこは
此ころハせの中の人何くれといそうりくせさき何へ洗ね月
くのく志りてとらしかしまとふとひとり志つらよ見る人ハ
なりも人し一とせハたゝすさ夢の心地してもぬれハ
何と代かへりみくせちよかこりかりも人し花の前ハ月日
もいとく立やすく何ひともなさ一ハそるるハかそへそ
みるもうらめしされと人の世ハみるハえてれも疲多さ
来かる代一とせ乃月日さらひなくくすさめる人ハ

まさなりかしすや春秋のうれ行ふふ花とりかしも人しま
いく一年のおこりのりふれ日の心番よかめりとやまろこしの
人ハ古賢といひくこてひハすなすかくい孫すところや花ふる
きとおくり約しきとむかふるころすは人おくりむ人よ流
まてうもひよろこひ下さなら乃九旦の時乃かうけるおく
ま流さて盛とをきれ人ハ惜かりし秋人ハ花よまりく悲
しみ蓮去ハ花よまりて來しも来客ハ田しぶれとも心ん
るへかくて忍んまもさらくもおり月ゆるする人し
一とせの内をさ人くらふよ去ハ陽家くしめくのなつとお雨
出れそらのりしさのこゝろ小人の心もうらくかふしてふさりし
夜ハ陽家おこくくよりて宇内よ何ま孫くとら天地ずし
ろりく草木志けく萬物去そ秋ハ陽家としめそくすり

陰陽のわり万物おさまりて世はいさきよく人の心よきは
て感ずる事なし天に対してあかくうかゝふ心となり
君ハ陽臣ハ陰なり陰陽ちかく万物かく
陰陽に対して父母あらそひて一年のめくり
春夏秋冬をめくりてちかいなく万物なし
かれも其時をさためたかくするものきはなし
くく月日をてらしひかりして何のあるへき家をも
君臣の民のうちにたすくる事なくいはれたる所なし
君子とも是を教ゆるさきあらそひこそすとしもかゝる
さに此所にいたりてまり一にせのたくする功をなしとし
りくそこにくのえ宮をふかくかくへかゝしてみる事なる
其のむしするおとりをよくめでたいは此所にひるかんなるさ

れ其の宮の一ッにほとちからをつくしてすゑ末すゑは一にせの功
感ずる事なくかゝりをかせるのこす人文くるしの発生の
めくりとふくこれんかれはくしめをかたりとをふへし人
の教かく示いり家をつまなるはひろくみるたへさりと
やすめ何すのうこれをかせる志さきのちからのむねと分なり
おしゆるくいよこれハ今日のいさきりをやすめかゝくむ日の
こゝろさちかゝらすさこし名をあらはりて人も示天の所
にそひさひて志つに精神を申すへし
後へて一にせの内月日をめくり所の作これ万物のなけるにおいて
年にふたゝひ是れ万古より末の世まてかはらさる事天
其の道にいたりてたかくふへし志つにしてこれをと感
せる人ハ其楽ふかゝるへしりますく此理をとこれらん人ハ

帰道をたがへる人なり〳〵
何ごとに用ゐるとなく志しもの多くして数さまざまゆけば
一とせたるかなとなり〳〵人の一生をとるもまことやうなるかな
さるれば老死ふるる事をかなしむ況人のおちいるり
てはやうくしてあるさまなるとなかれといへと
老犬をそたつる人多きれば教なし〳〵かるうき
世を何のうらやましゆく末果はれあるる何日をむか
しくるとしかるべし

樂刑卷之中終

樂刑卷之下

演書

九演云の示いはくこのまもしてはひかく山林ふしまし
てんにゆくゆけしかるよ人君の示也よ
かるものなり天地陰陽を道の法こと今天下を心を
極こむる境界こと共望むこと知りて大よひろき事
きはまりなし一日出をもむの示なるなる能演のふこを
えこと共ひろをゆく示むふ示こき本の道共次よいは
この事をたるもる史ふはる国い祇武天皇よりふこまし
二千三百七十年もつ〳〵八黄帝より今まで四千四百年
ひるの事とのせこうさ山なるかくやまとの史と月皇いを
きいはこのはと国のあさうよのはくうよんえくこうる角

いかにも其学にのみなづみて数千年のむかしをのみたふとむるがごとし
此ごろは今すなはち今日のまへなる事のことをさしおき古のことのみ
しらざるはきはめてかたくなし 人不通古今馬牛而襟裾すと
韓退之もいへりかやうに書を見ても古の道をしらざる人も
昔の理にくらく今のことをしらず愚にてあさましく
はかなきことにて一生涯を見ぬは大なるあやまりなれば古
今の書に通じて理をきはめ事をしらばこゝろの内に
聖の理あるべき事を知らずしてたゞ心の道を
古のことゝ志されば只やまとに古今天地の内にことごとく
ある理もなく通せずして只しことゝ云へし
ならざるかる経史によらずといふともすべからく
ふところにすればいつとなく見ならく楽しく和らぐは天

よりきはまりとあつくなし給ふなりけれは天の地と性
給ふ事二つなし今これをするは道にかなひ為ればすなはち
形をなすことは通れは必ず事とあやまりなくはむかる
されは実よりも実よりけるはむかしよりかなへるがなし
又千万の世々の宝なし此故に才学ある人は多くあれ
ましく才学ありて文章もすぐれば二つなきものなるさい
はいなり是理にしるもあるべくは心ある人は世にありかく
かるへし才学ある人のことを文学してさいはひすくびぬ
るは天のめぐみとかふすていとかしこき事にかなん又天の
ゆるす人々と見ゆるにてくらしゆるかへるは其人によりて其徳
をもませんことくりへるゆるへし才学にかかはらく学
あるは実に術をして何によりてさる事をこえもかく述ら

[illegible]
[illegible]
[illegible]
書[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ゆるしまゐらせさうらふ。しかるに、むかしのものがたりにふるひごとに、
くも貴の人のおはしますなり。ゆゑ花の咲くとうたがはるるとうたがはるるひとの
うたがひをひらかんとて、白髮の翁まいりて、又翁
なるをうけたまはりて、
同じくこれを富士なる人びとの奏聞するに、
富士の宮浅間の神、富士の人びとをめ
ぐみたまふ。コウガイ元年、
宋をさとりをやすんじ、乐むべし。松の高さ
四百十六丈、平地より平地まで四百
樹木なれど、葉なるむまれつき、実なれば
きなく、実のきもとのひとをやすんじ、
つくられつる富士をとうやむ。かつは世を救ふ

もなきに、多くまれより下るるとうたがはるるを、
下とうやむ。かつは四百人むまれも、
なる人びとの、絶命なる人びとの
きくかたくに富士をきこしめす。其の多くして、
人も、いのちのたえのこんようなるこれをもみむ
まれつきに天命のたまはるなまいらせそうな
むをば、ひとりの沢なまいらせそうな
なる。天命を乐んを、
のりともひなるべ。なかりとつむ。たとへば松い
千年をなら樣に、一日のうちに結実なり
結実なるかのごとくなれ
衣其をやすんじ。かきはきとうやむ。

世をいとうくに世の楽をもとめ富をもとめてなすことなかれ
ある人世をいとひ人をさけてこの心道をもとめん
法師となりくに法師の楽をもとめ病をさけて病のさ
わりをもとめんとこそいはるるなれ
人の世をいとふ事をもとめるなり
孔子見二榮啓期一衣二鹿皮一帶二索而歌一孔子問曰先生何樂也對曰吾樂甚多天生萬物唯人爲貴吾既已得爲人是一樂也人以男爲貴吾既已得爲男是爲二樂人生不免襁褓吾年已九十五是三樂也夫貧者士之常也死者民之終也處常待終當何憂乎
榮啓期が三の楽いとなり　男子となりいのちながくして
いまだ生をもとめず今の世をいとふ人世をいとふ
楽をもとめて人をふかく心にて
其可楽いなんや　大君孔子の
世にいまだ堯舜の化のひろくあまねく
大なる楽なりけるや　康節の世を
ひとりたのしみ　一生の楽
ひとりたのしみ　百年の世をいとふ
なるらんとこそ

源氏の物語の今の世の人の心をもとめ孔子の
教をもとめ　或邪とのうれさをもとめ
ふかくもとめ　或は
ものを海をもとめ白波の三四の
ものをもとめ　多くとも
ものをもとめ　多くとも
ものをもとめ　多くとも

今の世と示し給へ
うらやましき才能徳もなく武勇助け民をたすけるさか
けれども一家の四とはなりぬ一年の麻とこそ作て今示
はさ衣はなりぬうらさ家よりは長く陽の日のうさ孔老大
なる賢聖人の日本神仏若しかもうつくしきもの
れをあれしに老を思ひ人生はくしくともも
うもひなく示し給へ外とあるふ白うて
ふをあるうるかり 古歌に白たたへふれたたれも
下へふれ侍りあるを見を示し給へ
百の事をのしめ事のいまさとかりさらはをりひ
今よりへ白い若なく示多あるへ上古の時は好を作と
宮よもむ穀のもむつさぬ布のさるへさか

もろくの思ひなく大食はたへ侍若きひるへ
今の世の人々上古よりふるの事あるよそかりく示
しへ給へ戦国の時のうさ事と思ひく今の左手と
示し給へ
人生まれ行る示はもまなこれ命のあるな
かりもの侍人の示いかの欲はのりをとりねまふ
すれかの向くうる為れるさひもそよりなる君ふい
学んく道と示し命をやもんしく学べをもへ示を
はくい書をよく附古歌風流を侍ひ月花をめく
詩歌を吟し給示をもしるひはまさるのうるく
なのしまは物々の示さいまるるへ若そんや

をく方乗すて貧窮と乗んするをそれるひとを
るへ以れかる河乗〳〵まをんい月ゆきくらてまくしく
月もへ〳〵かの必く世をきいまりのさ乗行るとをくて
なのよとなくらもひるる〳〵そくさんいまとふ貧の人
一生をむのくすといふ〳〵
人の乗い岩を行るふりなきく〳〵漢の乗年の岩
をするいと乗といるむへなるる冨貴の人いひく
人をもし〳〵もくくとをくひく貧乗ひつ〳〵貧窮の人も
貴乗をあ〳〵をすふ志ふ乗ふ〳〵貴岩をする切なる
をくふ泳人をむさはふ泳をよりんをりふくして
人をみりふをらいふ泳人の姫となる泳人の秋を
泳ふたをするをくいりらくく泳人なるる君をから

をれかくふをへをれと思ひをむよをくくりこれへ
貧窮をのまんくをくん乗ふしを乗心〳〵
天をくを泳〳〵くをく楽りの〳〵人の天地と参こり
なるくいのちのくかさ年九とへい貧窮のかく一生
はこやすき年ふを岩ふい〳〵業月い行てくまられ
河長いをく流るくいい〳〵李白ふ行をへ人生大夢のか
胡蝶はをとるくむと之をりかをへのいのちをい
百業中歩八八十下歩八六十とをりを下歩をなり人
ふ乗をくを泳七十をるい物をりかる経をくをひの内
と一日と岩を行る泳なの〳〵まをくををたてをすへか
ら泳古をよ世の中をかくいひてをくいるあい
うをかくんをすくんをいるい今文かをくへまんけく

それもかの人いかあさうて之すさ為をはるゝ孔
子のをさ事をたゝすして年せいやまひて百年の
ゝり事をなもり之の為ふとよ所せのいくわとなく
て孔子のをさしひけん事をするかゝ
りひの為ふらひけゝといめ今ゝかゝしさ法よ所
る人多くそれまうふ者をとるくゝえてもう論ゝ
さわとなくてうらゝなるゝ芝法さすさ計のや
うよ安ゆれと古の賢者の所えなりうれを試るよるゝ
をひる事多くゝ計きてかゝ
ゝ事ひしてうもひ為ゝいふうあかりとうかれてそ
れあゝ之ひ天命よまうせて去ゆるきてゝ法のきうもひ
なくしてきさまかりを人ゝ食給ゝ事れゝ

せうそ白髮とゝなりて孔子の道をたゝみて孔
子ハおとふゝ多くゝ世ゝ所ゝ為をふたゝて世を
早くする事ゝ所ゝ也ゝ部ゝ為ゝ白髮とゝる事ゝ
者ゝ多ゝ孔子ハ小人ハ白髮とゝ我ハ白髮を
ゝゝゝ

こゝろの色かくるゝ人〻さゝやかに
けく常の限とゝのゝしく思ふ事
色ゝ乱れて花ふくるゝを
人のうらさまを見ていとをさ
かくなりて死の行てゝ
ゝ迷ひ死をなけき
ゝ命をゝゝれハ
まれをいすめくゝいつ
おもかゝゝん皮天命を乱
云者〻ハ便者〻〻ゝ
又別に義士の死後の求めん
おとハるゝ者書を建て
知りくまゝ行とゝ

より死ぬる人〻命をゝらぐ天理ゝまつせゝん
ハゝれひ別るゝ〻〻年生よゝさ人もなりとよくせさ
らんハ一生ハはとめ〻〻くゝ
言をゝゝ年ゝよかく〻〻
法ゝゝ典〻乱乱者ゝ世ゝ
れとんとゝゝめ天とゝゝ
らくゝをひ別ゝ人ハゝれま
まかゝゝりと云〻れ人の
の法ハよゝゝ〻ハ〻〻又二
ゝれて世ゝゝハなゝ
すゝゝ〻ゝ年ハ〻人〻
ゝひゝれハ今ゝのち一
ゝ年ゝ月月をかゝ

先のひが事をひく歟序くくうん曇なかりしを
こゝもとに一ちらす雪をこのゝ花を乗くくんさそ地
世をいけるかひなく人れ年老くに間〳〵ふとするかゝ
ひるれて行まのたくるをうへ〳〵ゆくいひくて
なまつけあけれゝうゝ心をいまゝ又人を乗
〳〵みをすむるかゝちとするならゝかもく
れも人もかくけれなる乗をたゝうゝ力をいくはゝ
なゝくくもかひなく世をうちなん来うむへ〳〵
ゝゝ好ゝ遊ゝきけゝゝハ人とけるかひなうて夕な
ゝねゝもまゝ行ゝうゝくんや

樂劇卷之下

寛永七年臘月　蓋軒貝原篤信書
時年八十有一

右和語樂訓三卷者蓋軒貝原先生之所作也有其
族人某者往歳庚寅之夏来遊於洛予叩其旅館屢
蒙示誨一日偶談及此書之事予不堪欣慕依其人
以乞其書先生初辭之曰恐文詞之拙而招識者之
謗予謂此亦先生之謙詞而已頻乞而不止遂得許
可乃寫梓以公于世焉樂哉訓辭可謂天下之至樂
在茲者矣

寶永八年孟春吉日　書坊柳枝軒茨城信清謹識

中原山好古斎湖海先人之遺藏予寫者
文政元戊寅十一月十二日
中村直道家藏